1部70円（税抜き）

対がん協会報

第616号　2014年（平成26年）11月1日（毎月1日発行）

公益財団法人 日本対がん協会　「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100－0006　東京都千代田区有楽町2－5－1　有楽町センタービル（マリオン）13F
☎（03）5218－4771　http://www.jcancer.jp/

主な内容
1面、2面　ピンクリボンフェスティバル2014
4面　RFL2015ヒーローズ・オブ・ホープ受賞者決定
8面　2014年度RFLプロジェクト未来研究助成金決定

ピンクリボンフェスティバル2014が開幕

綾戸智恵ライブ、スマイルウオーク、シンポジウムなどで乳がんを啓発

ピンクリボンフェスティバル2014（主催：日本対がん協会、朝日新聞社など）が開幕した。都内各所のピンクライトアップを皮切りに、ジャズシンガー綾戸智恵さんのライブ、恒例のピンクリボンスマイルウオークやシンポジウムなどの啓発イベントが東京、神戸、仙台で開催され、乳がんの早期発見・早期診断・早期治療の大切さを広く伝えた。

ピンクリボンフェスティバルは今年で12回目。10月2日に朝日新聞東京本社内で開かれた記者会見には、12回連続参加となる「ミスター・ピンクリボン」ことスポーツキャスターの荻原次晴さんや、今年初参加のモデルの長谷川理恵さん、スポーツキャスターの宮下純一さんも駆けつけ、それぞれ抱負を語った。荻原さんは「初参加の時には乳がんにかかる女性は30人に1人と聞いていたが、今年は14人に1人。改めて乳がん検診の大切さを痛感しました」と述べ、自身もマンモグラフィー検診を受けたことを披露。誕生日や結婚記念日にパートナーと一緒に検診を受けに行こうと呼びかけた。

同日夜はオープニングナイトとして、「綾戸智恵ライブ＆トーク Smile　Forever」が東京・中央区の浜離宮朝日ホールで開催され、大勢の観客が綾戸さんのパワフルな歌声と爆笑トークを楽しんだ。ライブの冒頭では「第10回ピンクリボンデザイン大賞」のグランプリ作品の表彰式も行われた。

10月4日にはフェスティバルのメーンイベントで秋の風物詩ともなった「ピンクリボンスマイルウオーク」が実施された。今年は原点に戻り、12年前と同じ六本木ヒルズからスタート。ピンク色のものを身につけた4400人もの人々が、初秋の都心を彩った（2面に関連記事）。スマイルウオークは10月18日に神戸で、10月25日に仙台で開催された。今年は天候にも恵まれ、それぞれ3200人、2100人の人々が乳がん検診の大切さを華やかにアピールした。

記者会見で決意を語る荻原次晴さん、長谷川理恵さん、宮下純一さんとオフィシャルメッセンジャーのモモ妹 PostPet™ ©So-net

10月5日にはフェスティバルのもう一つの柱であるシンポジウムが、東京・千代田区の有楽町朝日ホールで開催された。荒天の中、680人もの聴衆が集まり、最新の治療情報や心のケアに関する話に熱心に聞き入った。東京都足立区から参加した3人組の女性たちは、区の保健所でイベントを知り、毎年参加しているとのこと。「毎年楽しみにしているので、雨ぐらい平気。先生が新しい治療法をわかりやすく解説してくれるとすごく安心するのよ」と話した。

東京会場は乳がん専門医の北里大学病院乳腺・甲状腺外科科長の谷野裕一先生、昭和大学医学部乳腺外科教授の中村清吾先生に加えて、新しい試みとして乳がん患者・家族の心のケアをテーマに、聖路加国際病院精神腫瘍科部長の保坂隆先生の講演も加わり、がん経験者や家族の幅広いニーズにこたえる内容となった。シンポジウムは神戸でも10月19日に開催された。

がん相談ホットライン　祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談（無料、電話代は別）に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」（☎03-3562-7830）を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談（要予約）
予約専用　03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談（ともに無料）を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分（診療ではありません）。詳しくはホームページ（http://www.jcancer.jp/）をご覧ください。

ピンクリボンスマイルウオーク2014

4400人が乳がんの早期発見、乳がん検診受診をアピール

10月４日(土)、ピンクリボンスマイルウオーク2014東京大会（主催：日本対がん協会、朝日新聞社、テレビ朝日）が開催された。12回目となる今年は、発着地点を初回開催時と同じ六本木ヒルズアリーナに移し、原点に戻る大会となった。今年は６キロの表参道コース、11キロの丸の内コースに加え、日本橋再開発エリアに足を延ばす14キロの日本橋コースを新設した。３コース合わせて4400人もの人たちが参加し、華やかに乳がん検診の大切さをアピールした。

ミスターピンクリボンはさすがの健脚

当日はモデルの長谷川理恵さんが表参道６キロコース、スポーツキャスターの荻原次晴さんが最長の日本橋14キロコースを先頭に立って歩いた。元スキーノルディック複合日本代表選手の荻原さんはさすがの健脚ぶり。アテンドしたウオーキング協会の関係者もついていくのがやっとの速さだったそう。

２人はその後疲れも見せずに、乳がん専門医の東海大学医学部教授の徳田裕先生とのトークショーや、お楽しみ抽選会で会場を盛り上げた。神戸のアイドルユニットKOBerrieS♪も、地元神戸大会に先立ち出張出演。華やかなステージで会場を盛り上げた。

出発を前に気合いを入れるゲストたち

ボランティアの大学生が活躍

会場のあちこちで活躍ぶりが目立っていたのが、東海大学健康科学部看護学科の大学生たち。受付や会場整理、ウオークスタート時の誘導など各持ち場に分かれてイベント運営に協力した。昨年参加した学生も多く、応対も手慣れたもの。初参加の女子学生は「看護師になるための学科なので、みんな関心は高いです」と意欲を語ってくれた。終了後は同じ東海大学の徳田先生を囲んで集合写真を撮影。同大の学内報でも紹介されるそうだ。

親切に応対する東海大学の学生

企業ブースも大盛況

会場には協賛企業や後援の東京都、乳がん啓発団体などのブースが設けられ、大勢の参加者で賑わった。各ブースでは試供品や製品のプレゼント、ピンクリボングッズの販売などが行われた。初参加の久原本家茅乃舎のブースでも、早々にプレゼントが無くなり大慌てだった。

東京、神戸、仙台の３会場でオリジナルのマンモグラフィ検診クーポン券を配っている、森永乳業の山本美穂子広報部ＣＳＲ室長は「150枚ほど配布するが、午後にも残っているか問い合わせが沢山あった。全社を挙げて参加できるイベントということで、生活に密着した乳業会社にふさわしい、女性に関係の深いピンクリボンを支援しています」と話す。

今年初参加のダスキンは、同社が2006年から実施している「ダスキン・クリーンアップマイタウン活動」をスマイルウオークでも実施。希望者は同社のブースでピンクの軍手・ゴミ袋を受け取り、ウオークしながら沿道のゴミ拾い活動をした。

家族や友人同士、当日参加者も

家族や友人同士で参加している人たちも多い。２家族で参加した大島さんと張本さんは妻同士が同じスポーツクラブ仲間。クラブの掲示板でスマイルウオークを知って２家族で参加を決めたそう。ニューバランスのブースを覗き込んでいた佐藤広美さんと渡辺律子さんは、友人同士でお揃いのニューバランスのシューズ。去年歩いてすごく楽しかったので今年も参加したとのこと。今日のために近所を歩いてリハーサルしたそうだ。

今回は会場がオープンなこともあり、当日飛び入り参加の外国人の姿も目立った。どの参加者もリラックスしてウオークを楽しんでいる様子で、スマイルウオークがすっかり定着していることを実感した。

無事東京大会を終えて、協力のＮＰＯ法人神奈川、埼玉、千葉ウオーキング協会の皆さんもようやく肩の荷を下ろした様子。コーディネーターの安樂四郎さんは「天候に恵まれて本当に良かった。まだ神戸、仙台と続くので乾杯はもう少しお預けです」と話した。

お揃いのシューズで参加

シリーズがん教育②　すべての子どもにがん教育を

東京大学医学部附属病院准教授　中川恵一

がん教育を考えるシリーズの第２回に登場するのは、東京大学医学部附属病院放射線科准教授の中川恵一先生。中川先生は日本対がん協会が朝日新聞社と共に実施した「ドクタービジット」を始め、がん教育に先駆的に取り組んできた。文部科学省の「がん教育の在り方に関する検討会」の検討委員でもある中川先生に、なぜ今学校現場でがん教育が必要なのかをお聞きした。

日本はがん教育後進国

――なぜ学校現場でがん教育が必要なのでしょうか。

がんという病気の特徴は、ちょっとした知識と行動で大きく運命が変わるというところにあります。なのに誰も教えてくれないから、一般の人は知識にアクセスできません。学校の保健体育の授業だって実際は「体育体育」で、せいぜい雨が降った時にやるのが保健というのが実情でしょう？だからがん検診の受診率も低いし、治療法にしても、たとえば子宮頸がんの場合、日本では８割の人が手術をしますが、欧米では８割が放射線治療を選ぶんです。

――放射線治療の方が良いということですか。

選択肢があるということを知るのが大事なんです。でも日本ではがん＝手術。それ以外に知らないんですから。それで不幸な結果になることもある。僕はたまたま放射線科や緩和ケアの領域でずっと仕事をしてきたので、そういう問題点が良くみえたのです。がんになっても色々な選択肢があり、それぞれの治療法の良い点、悪い点があるということを知っているだけでも良い。それができるのは学校教育以外にないんです。

ドクタービジットで授業中の中川先生

――現状は情報源が限られています。

がんのことを知るのはせいぜいテレビからなのですが、テレビはやはり「神の手」なんですよね。ブラックジャックの時代からドラマの医者は外科医です。そしてテレビで描かれるがんは亡くなることが多い。だから子どもたちにがんのことを聞くと、痛い、怖い、死ぬ病気、脱毛、抗がん剤といったネガティブなイメージばかりです。

出張授業でがん経験者の方が話をすると子どもたちがびっくりするんです。がんになった人がこんなに元気なんだって。これだけがんになる人が増えている時代に、そんな状況のままでいいわけがないでしょう。

信頼できるテキストが必要

――学校現場では負担が重いという声もあります。現場の教師にどんな支援ができますか。

僕は保健体育や養護の先生を対象にずいぶん講演をしましたが、彼らの知識は一般の人と同じです。知らないことは教えにくいんです。それに、にわか知識で教えてはいけません。ですから先生方が困らないようにわかりやすくて全国の学校で使える、きちんとオーソライズされた教材を用意する必要があります。例えば授業は今制作中の『がんって、なに？』などの映像教材を使って教え、子どもたちの質問には先生がきちんと答える。その際も想定問答集や、教師用の虎の巻のようなものを用意すると良いと思います。

――がん教育を教える学年や教科についてはどうお考えですか。

僕は２段階で構えるのが良いと思うんです。まずは各教室で先生が教え、年に一回ぐらい１学年皆が集まって、がん経験者や医者の話を聞くといった具合に。その場合、教室での授業はやはり保健、講演は総合などの時間になると思います。実施学年は義務教育の中学生でまず実施してほしい。本当はがんを理解するのに必要な、生物学の

知識がある中学３年生が一番良いのですが、受験があるので中学２年生ぐらいが適当だと思います。

多様な外部人材を活用

――外部の組織や人材の導入についてはどんな方策が考えられますか？

例えば文科省の事業で「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」という、がんの専門医療人を養成する大学院プログラムがありますが、そこで学んでいる若い医者たちに授業をしてもらう方法もあります。彼らの関心は高いですよ。医師会もがん教育に協力すると言っていますし、各学校には校医もいます。もちろんすべての校医ががん教育をできるかは若干不安がありますが、本来そういうことができなければ、校医でいる意味がないんじゃないかな。

――日本対がん協会や支部に期待することをお聞かせ下さい。

対がん協会に作っていただいたがん教育ＤＶＤ『がんちゃんの冒険』は文科省が制作協力となり各所で活用されています。制作中の『がんって、なに？』も信頼できる教材です。これらを現場の先生方が広く使えるようにしてほしい。また、患者会などとのつながりを生かして、現場で話せる人を紹介してほしいと思います。日本のがん啓発をけん引してきた対がん協会の力を貸していただくことで、結果的にがん検診の受診率を上げていくことにもなると思います。

（聞き手　日本対がん協会広報グループマネジャー　本橋美枝）

リレー・フォー・ライフ

「2015ヒーローズ・オブ・ホープ」受賞者決定！

がん患者の希望の光、それがヒーローズ・オブ・ホープだ。自らの病と闘い、人々に希望や勇気を与え、前向きにがんに立ち向かうサバイバーの代表として、アメリカ対がん協会から認定される。

本年度は、世界各国より31名、日本からは３名が選ばれた。この栄誉ある賞は、リレー・フォー・ライフ（RFL）を通じた３名の活動が大きく評価されたものだ。

受賞されたヒーローたちには、日本対がん協会と共にがん征圧を訴え、ご自身のがん体験をさまざまな機会で共有していただく。

（五十音順）

柄澤清子さん
RFLJ 2014信州長野
実行委員長

若い実行委員から「おかあちゃん」と慕われる柄澤さん。サバイバー歴は長く、乳がんは37年、肺がんとは28年の付き合い。「死ぬ前に怖かった水泳に挑戦したかった」。その意思は強く、今やインストラクターの資格を持つ腕前だ。

「まだまだがんは不治の病と思われていますが、お蔭様でこうして元気で生活しています。大勢の皆さんに元気でいていただくために、楽しく啓発活動をして、がんに関する正しい知識を持っていただきたいと思います。そのためのリレーを通じた交流はとても効果的で、自ら進んで体験発表をしています」と、日頃からがん啓発への想いは人一倍強い。

受賞後のコメント

賞をいただいたのは、私だけの力ではありません。大勢の仲間と一緒にいただいたものだと思っています。今後もがんに負けない社会を実現できるようRFLの活動を続けてゆきたいと思います。

鈴木牧子さん
RFLJ 2014福島
実行委員長

2003年に卵巣がんを告知され、抗がん剤治療を経験。「副作用や多くの友人の旅立ちにより、将来の希望が見えない時期もあった」と胸の内を語る鈴木さん。しかし2006年のRFLとの出会いにより、彼女は前向きに本来の明るさを取り戻した。北海道・東北ブロックを中心にRFLでの活動範囲は広がり、今や彼女のニックネーム「まきどん」は全国区だ。

地元福島では、2010年にRFLイベントを開始。2011年は震災とそれに伴う放射能の影響により開催も危ぶまれたが、彼女の強いリーダーシップのもと、今年で５年間継続しタスキは繋がれた。

受賞後のコメント

この度の受賞は、福島実行委員会のご支援と共に、日本中のRFL仲間のご指導の賜物と御礼申し上げます。また、2008年全国６ヶ所開催の際、命がけで室蘭開催を果たした朋友故金子明美さんとわかちあいます。

中村伸一さん
RFLJ 2014福岡
実行委員長

「妻のがんによる他界と、自分自身の前立腺がんの告知により、がんがより身近なものとなりました。リレーの活動を通じた社会貢献の重要性と使命を益々強く感じたのです」。

仕事をリタイアした今、５年目のRFLはもはや中村さんのライフワーク。RFLで知り合ったサバイバー仲間に対する友情は熱く、「絆を大切にしたい」と語るその眼はとても優しい。

参画しているNPO法人キャンサーサポートでは、小・中学生を対象に「命のホームルーム」を行い、リレー以外の対がん活動にも積極的だ。

受賞後のコメント

選出の報に接し、驚きと共にその使命に緊張するばかりです。この選出は福岡実行委員全員のものと思います。今後は微力ではありますが、これまで以上にRFLの活動を通してがん啓発に邁進していく所存です。

たすきをつないで5年目　RFLJ岡崎

「みなさん、こんにちは！」山口史依実行委員長のひときわ元気な呼びかけで、リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014岡崎が幕を開けた（９月27日～28日、愛知県岡崎市暮らしの杜）。爽やかな秋晴れの中、大勢の参加者が再会を喜び合った。

様々なサバイバーチームの他に、地元中学卒業生チーム、岡崎市保健部職員や知多厚生病院、愛知県がんセンター愛知病院、岡崎市民病院の有志など地元医療者チーム、初回から参加の岡崎信用金庫やソニー生命、ブラザー工業グループなどの企業チームもお揃いのＴシャツでリレーウォークに参加した。

実行委員を先頭にリレーウォーク。中央が山口史依実行委員長、その右が米山三香恵副実行委員長

ステージでは全盲の歌姫のライブや、岡崎市保健所職員によるがん知識を啓発するクイズなど、多彩な演目が会場を盛り上げた。

医師と患者が本音で語る場も

グラウンド脇の教室では愛知県がんセンター愛知病院有志によるセミナーが開かれた。題して「がん患者・家族と医療者のフリートーク―病院では聞けない医療者のホンネ―」。同院は県内でも有数の緩和ケア機能を持ち、今年７月に地域緩和ケアセンターをオープンさせたばかり。同センター長の橋本淳医師が「普段病院や診察室ではなかなか言えないことを、この際ざっくばらんに本音で語り合いましょう」と呼びかけると、最初は遠慮がちだった聴衆から「５年生存率ってよく言うけど、一体どんな根拠や基準があって言っているの」「先生の言い方次第でずいぶんショックの大きさが違う」「退院後も定期的に診察してもらうが、先生に会うたびに、また出たら（再発したら）叩いていこうと言われるのが辛い」といった本音が次々飛び出した。橋本医師は「医者も告知するのは嫌な仕事、とてもストレスを感じる。がん告知の仕方を学ぶ研修は必修だが一回だけ。コミュニケーションスキルを上げる研修は任意。ダメな先生ほど必要を感じていない」などと答えた。改めて患者と医療者がざっくばらんに話し合う場の必要性を感じた。

リレー・フォー・ライフ・ジャパン岡崎は、地域のサバイバーや家族、医療者、企業などのがん征圧への熱い思いに支えられて連続５回の開催を実現してきた。手作り感あふれるイベントの準備には大変な労力がいるはずだが、当日の会場にはその疲れを吹き飛ばすような明るい笑顔と暖かい連帯感があふれていた。

会社ぐるみで参加 ワールドワイドにリレーを支援 ブラザー工業

今年280名が参加し、会場でもひときわ目立っていたのがブラザーチームジャパンの皆さん。ウォーキングスタイルの小池利和社長は「そりゃ、この人が強引だから」と同社コーポレートコミュニケーション部の今井さとみさんを指してにやり。「何しろ時期が近づいてくると一日３回もメールが来るんだから」。仕掛け人の今井さんは、「社内の他の部署ともコミュニケーションができ、グローバルに一体感を持てるようなイベントが無いか探していた時に、日本でもリレーが始まったことを知ってぜひ参加したいと思いました」と話す。

動員力抜群の今井さん

岡崎実行委員会のメンバーも毎年何度も同社に出向いて説明会を開催し、がん征圧への思いを伝えた。実は小池社長は米国に23年間も駐在しており、アメリカ対がん協会の活動や寄附文化が社会に根付いていることを肌で知っている。同社の売り上げの８割を海外が占めるということもあり、アメリカで1998年からリレー・フォー・ライフに参加したのを皮切りに、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、マレーシアなど16か国でリレーを支援している。

「企業の社会貢献とか難しいことは考えていないよ」と謙遜するが、この日ばかりは出張も調整して欠かさず参加している。社員からも「明るい笑顔と元気にパワーをもらった」「小さな思いが重なれば大きな力になると実感した」などの声が沢山寄せられた。岡崎会場での会社ぐるみの和気藹藹とした雰囲気に同社の風通しの良さを感じた。

ブラザーの皆さん。左端が小池利和社長

奨学医レポート　RFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞

MDアンダーソンがんセンター研修を開始して

日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科　原野謙一

このたび、日本対がん協会RFL マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を頂き、2014年７月29日より、MDアンダーソンがんセンターで臨床研究を開始致しました。貴重な機会を頂き、ありがとうございます。

アメリカに来て約２ヶ月弱が経過し、徐々に生活に慣れてまいりました。「生活のセットアップは大変だよ」と、これまで留学経験者の先生方が異口同音に仰っておりましたが、本当に大変でした。カルチャーショックの連続です。色々ありました。約束の日に運送会社から荷物が届く事はなく、また院内のあらゆる手続きが遅い、オンラインで購入した家具がことごとく不良品で、クレームをしても動かないなど、アメリカののどかというかルーズさを体感しました。

また、普段当たり前と思っていた日本の規則正しさ、インフラの素晴らしさに気付かされました。個人的には、不慣れな料理をしたら指を切って蜂窩織炎になってしまったとか、買ったばかりの車が早々にパンクしたりとか(しかも高速道路で)、失敗を挙げればきりがありません。笑い話になりつつありますが､毎日必死で生きております。

MDアンダーソンがんセンター乳腺腫瘍内科、上野直人教授のもとで、ポスドクとして臨床研究を開始しました。当ラボは、基礎研究チームと臨床研究チーム双方のラボを構える、比較的大規模なチームです。トランスレーショナル研究が盛んに行われております。具体的には、基礎研究チームがある分子標的薬の臨床前研究を示した際に、その後臨床研究チームでphase１studyを立案するなど、基礎研究と臨床研究が盛んにコラボレーションしております。このようなコラボレーションはこれまでの勤務病院でみられなかったので、私個人としては非常に新鮮です。これこそが、トランスレーショナル研究だと感激しております。これを体感できただけでも、今回留学をすることが出来てよかったと思っております。

上野直人先生と

古川孝広先生と

私は現在、phase１臨床試験の立案や、トリプルネガティブ乳癌の後方視研究を開始しました。これから様々な研究を開始する予定です。今の環境は自分にとって大変ありがたく、幸せに感じております。

現在、臨床研究チームはすべて日本人の研究者です。同じような苦労を分かち合う同志であり、彼らの存在は非常にありがたいです。９月初旬までマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞２期生の古川孝広先生も研究室にいらっしゃり、手取り足取り研究を教えていただきました。基礎研究チームには、様々な国から研究者が集まっております。カンファレンスその他で盛んに交流しております。ただ、日本で自分なりに英語の勉強をして行ったのですが、実際に渡米して生活すると、まだまだ英語力の未熟さを痛感させられます。これから少しずつ語学を習得して行きたいと思っております。

ようやく留学生活が始まったばかりです。これから、研究に励みつつ、またアメリカでの生活を楽しみたいと思っております。

Topics

昨年度の禁煙ポスターが本になりました。

広告デザインやアート関連の書籍を数多く出版しているパイ・インターナショナル発行の『思わず目を引く広告デザイン』に、日本対がん協会の昨年度の禁煙ポスターが収録された。同書籍はここ２、３年に発表された、消費者が思わず心を奪われる広告作品や、思わず目を引くアイデアがある作品を編集部が独自に選んだ作品集。「視覚を刺激する」「ユーモアで伝える」「違和感を与える」「驚かせる」「体験させる」の５つのジャンルに分けて約140作品が掲載されている。いずれも見れば「ああ、これね」と記憶に残る作品ばかりだ。

2014年10月 パイ・インターナショナル発行

昨年度の禁煙ポスター

対がん協会の禁煙ポスターは、煙草を吸っている男性の頭上に死神が浮かんでいるというショッキングなもの。「驚かせる」のジャンルで選ばれた。見る人に衝撃を与える訴求力の強さが選出理由だそうだ。全国の書店で発売中。デザインを学ぶ学生や、広報担当者におすすめだ。

Topics

PINK PONY DAY
ラルフ ローレンががん征圧に寄付

ラルフ ローレン株式会社（東京都千代田区）が、恒例のチャリティーイベント「PINK PONY DAY」を10月24日に開催した。同社ががんの早期発見、診断、治療に関する知識向上、医療格差の改善を目的に、10年以上にわたって世界中で行っているピンクポニーキャンペーンの一環だ。トレードマークのピンク色のポニーをあしらったTシャツやポーチなどの限定グッズを販売し、売り上げの一部を各国のがん啓発団体などに寄付している。日本では、日本対がん協会を寄付先として、2003年から同協会の活動を支援している。

目うつりしそうなスイーツの数々

「PINK PONY DAY」では、参加者全員がおそろいのピンクポニーTシャツを着て街頭をウォークしてがん啓発を行うピンクポニーウォークや、本社のホールに陳列された同社のアイテムに入札して競り落とすサイレント・オークション、お菓子作り自慢の社員やパティシエが作った美味しいケーキやスイーツの販売といった、楽しい趣向を凝らしたイベントで寄付を集め、その売上金額は全額対がん協会に寄付される。今年は約280万円の寄付が集まった。

ハワード・スミス社長（中央）を先頭にスタート

当日は爽やかな秋晴れの中、ハワード・スミス社長を先頭に東京赤坂の日枝神社からウォークがスタートした。参加者はピンクポニーTシャツをおしゃれに着こなし、全長3.7キロのウォークを楽しんだ。

中学生130人からの手紙　がん教育を受けて

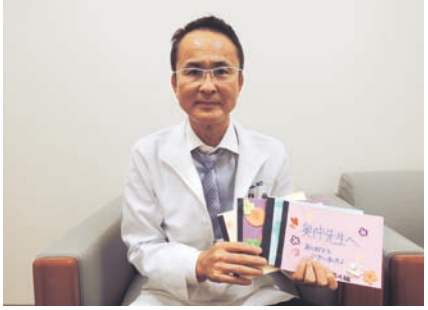
川崎市立中原中学校の生徒からお礼の手紙集が届いた。日本対がん協会が９月に行ったがん教育の出張授業の感想がつづられている。あたたかみのある手作りの文集だ。講師を務めた奥仲哲哉先生（山王病院副院長・呼吸器センター長）に届けると、「すごい。真面目に聞いてくれたいい生徒たちだったなあ」と授業を振り返って喜んだ。

授業では、奥仲先生が担当した症例など医療現場の生の話を聞いて、がんに対する印象が変わった生徒が多くいたようだ。「がんは誰でもなりうる病気」「治療や手術の医療技術が発達して、以前より患者の負担が軽くなったことを初めて知った」「がんは怖くないとわかった」といった感想が多く見受けられた。

普段から規則正しくバランスのいい食生活を心掛けるとか、大人になったら検診に行くといった行動目標を書いている生徒もいた。「親に禁煙をすすめる」「がんについて家族と話そうと思う」「医療業界に興味を持った」という感想もあり、授業をきっかけに関心が広がったようだ。

生徒たちはこの授業の前にがん体験者が主人公の映画を見たり、前後でアンケート調査に回答するなどした。一連の学習を通して、じっくりがんと向き合えたようだ。授業に参加した教職員からも、「生徒たちががんを身近に考えられたと思う」「大人にとってもためになる話だった」といった感想が出た。

中原中は、文科省が推進するがん教育総合支援事業のがん教育実施校のひとつ。今後、川崎市の取り組みのひとつとしてまとめられる予定だ。こうした全国からの事例をもとに、文科省が開催するがん教育の在り方に関する検討会などで、今後３年間に渡り審議していく。


手紙集を手にして喜ぶ奥仲先生

生徒たちの手作りの手紙集

応募総数69通から14件を採択
2014年度ＲＦＬプロジェクト未来研究助成金決まる

リレー・フォー・ライフに寄せられる寄付を基にがん研究をサポートする「リレー・フォー・ライフ（ＲＦＬ）プロジェクト未来」研究助成金の、2014年度の採択者が10月17日に決まった。この助成金は患者や家族、支援者の希望を実現するための日本国内の研究を支援するもので、今年度で３回目となる。同助成金審査委員会での審査、並びに日本対がん協会理事会の承認を経て、下記の通り決定した。応募総数は69通と過去最多で、審査会では採択者を選ぶために真摯な検討がなされた。そこで今回は１件当たりの助成額を減らしてでもより多くの研究を助成することとし、Ⅰ分野（基礎研究・臨床研究）から８件、Ⅱ分野（患者・家族のケアに関する研究）から６件の計14件に、総額1500万円を配分することになった。

採択者と研究テーマ、助成金額は下表のとおり。

2014 年度　採択者

Ⅰ分野（基礎研究・臨床研究）

（五十音順、敬称略）

応募者名	所　属　組　織	テ　ー　マ	助成額
片桐　豊雅	徳島大学　疾患ﾌﾟﾛﾃｵｹﾞﾉﾑ研究センター　教授	内分泌療法抵抗性乳がん克服に向けた新規ｴｽﾄﾛｹﾞﾝｼｸﾞﾅﾙ制御機構の解明と革新的治療法の開発（継続）	100 万円
近藤　　豊	名古屋市立大学大学院医学研究科　教授	がん細胞における機能性非翻訳 RNA を介したエピゲノム修飾制御に関する研究	200 万円
清水　重臣	東京医科歯科大学　教授	オートファジー細胞死を標的とした新規抗癌剤の開発（継続）	100 万円
筆宝　義隆	国立がん研究センター研究所　ユニット長	難治がんの新規分子治療標的候補に対する発がん再構成系を用いた治療戦略の構築	200 万円
松井　啓隆	広島大学原爆放射線医科学研究所　准教授	リボソーム RNA プロセシング異常による造血器腫瘍発症メカニズムの解明	200 万円
南　　優子	筑波大学　医学医療系診断病理学　准教授	遺伝子解析・免疫染色を用いた革新的肺癌喀痰検診の癌発見率向上のための研究	200 万円
安永　正浩	国立がん研究センター東病院　ユニット長	難治性固形腫瘍を標的にした抗間質抗体・抗がん剤複合体の開発（継続）	100 万円
吉田　清嗣	東京慈恵会医科大学生化学講座　教授	がん幹細胞の可塑性制御とがん治療に向けた応用展開（継続）	100 万円

＊継続は昨年度より継続して採択

合計 1200 万円

Ⅱ分野（患者・家族のケアに関する研究）

（五十音順、敬称略）

応募者名	所　属　組　織	テ　ー　マ	助成額
大杉　夕子	大阪医療センター小児科　医長	小児がん経験者を対象にした晩期合併症と quality of life に関する調査研究	50 万円
小川　朝生	国立がん研究ｾﾝﾀｰ東病院医師	外来治療中の患者・家族の療養生活の質の向上を目指した Patient Reported Outcome(PRO) を用いたコーディネートプログラムの開発	50 万円
関　由起子	埼玉大学　教育学部准教授	がんの子どもの復学支援体制に関する研究　- 病弱特別支援学校のセンター的機能を中心に -	50 万円
田淵　貴大	大阪府立成人病センターがん予防情報ｾﾝﾀｰ　課長補佐	がんサバイバーにおける多重がん発症とその死亡リスクに関する実証研究	50 万円
成松　宏人	山形大学大学院医学系研究科准教授	がんサバイバーの生活習慣のマネジメントに関する研究	50 万円
橋本　伸之	大阪府立成人病センターリハビリテーション科　部長	患者アドボカシー活動の積極的支援による骨転移診療の改善	50 万円

合計 300 万円